
魔法少女まどか マギカ 『もう誰にも頼りたくない』

資源?世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ 『もう誰にも頼りたくない』

【Nコード】

N7997V

【作者名】

資源？世

【あらすじ】

まどかを魔法少女の運命から救おうとするほむらは、まずは影響力の大きなバミを味方につけることを思いつく。バミには思っていた以上に簡単に受け入れられるが、その後待ち受けていたのは別の意味での苦難だった。

それは晝美ほむらが幾度と繰り返した時間の中で見た一幕。時の迷い子の見たそれは夢か現か……。ただ、一つ言えることは……

メガネに三つ編み姿、更におどとした態度でほむらは、恥ずかしそうにきりだす。

「あ、あの…… わ、私と、その…… い、一緒に、戦って…… 戦ってくれませんか？ バマミさん」

「え？」

驚きの声をもらすバミ。何故か、ふらふらと後ろによるめき、息を荒くしながら自分の両手をみつめる。

「ゆ、夢じゃ…… 夢じゃないわよね？」

「は、はい……？」

妙な雰囲気ながらもバミはしっかりとほむらの手を握り締め、涙目になりながら嬉しそうに微笑みかける。

「ええ！ 一緒に…… 一緒に戦いましょう！ これでもう体育の時間に二人一組になるのも、クラス内でのグループ分けのときも、宿題を忘れた時であろうと、もう何も怖くない！」

「え？ いや、ちょっと…… クラスどころか学年違うから、そう

「いうのはちょっと……」

「大丈夫よ！　あなたが宿題忘れたときは私のを写させてあげるから！」

「は、はあ……」

繰り返す時間の中でQ Bの次にまどかに影響を与える存在……
巴マミ。メンタルに不安が残るものの、彼女の実力は間違いない一級だ。ならば、彼女と敵対せずに協力者になってもらえれば、まどかが魔法少女になることを阻止する布石としても、ワルプルギスの夜との戦いでも重要なファクターとなるはず。

そう考えたほむらは、一人ぼっちの心の隙間を埋めるような『頼ってくる後輩』を演じてマミに近づいたのだが……

「そうだ、今日は大きなケーキを買ってパーティを開きましょうね。私と曉美さん、魔法少女コンビの結成をお祝いして！　体が軽い、こんな幸せな気持ち初めて！　もう一人ぼっちじゃないもの！」

予想以上に好意的に受け入れられすぎて、何かを間違えてしまった感が拭い去れないほむらであった。

そして、その不安は予期した通りとなり……。

——翌日

「しまっ——！」

「危ない、マミさん！」

魔女の攻撃をマミが受けそうになった直前に、ほむらは時間を止め、かるうじて助けることに成功する。

「ありがとう、暁美さん。助かったわ」

「いえ、マミさんが無事でよかったです」

——翌々日

「きゃっ！」

「危ない！」

次々に襲い来る使い魔達の攻撃にマミはついにかわしきれなくなる。ほむらはすぐさま銃で援護射撃をして、その場はなんとか凌ぎきる。

「ありがとう、暁美さん。助かったわ。一人だったら、どうなっていたことか」

「いえ、間に合ってよかったです」

——一週間後

「はっつ！」

「あー、もう！」

魔女の結界内で足を踏み外し、高所から落ちそうになるマミ。ほむらは既に予測していたらしく、あっさりとそれを拾い上げる。

「ありがとう、暁美さん。おかげで助かったわ。今日もあなたに助けられちゃったわね。もう、先輩の私がつとしっかりしなくちゃいけないのにな。てへっ」

そう言って、マミは自分の頭をこつんと小突く。

「……はあ」

NPCとして登場していたときは圧倒的な強さを見せていたくせに、いざ仲間になったらまるで別人のように弱くなる。RPGだとよく見かけるが、まさか現実にもそんな人がいるとは、さすがのほむらも予想できなかったのだった。

「苦労しているみたいだね、マミ」

「あら、QBじゃない」

「……」

「何をイラついているのか知らないけど、挨拶がわりに僕に銃を向けるのはやめてもらえないかな、暁美ほむら」

「……ちっ」

マミもいる手前、ほむらは舌打ちしながらも銃をしまつ。もっと

もいつでも狙い撃てるように視線でのターゲットは外さない。

「ワルプルギスの夜が近付いているせいかしら？ 最近、魔女が強くなってるみたいなの」

「そうなのかい？ それじゃあ、やっぱり魔法少女を増員——」

再びほむらの銃口がQBを狙う。

「こら！ ダメよ、曉美さん。魔法少女を増員されたら、私が新しく入った子に取られちゃうのが怖いからって。みんな仲良くしなくちゃダメよ！」

「……こいつは」

「でも、増員はもう少し様子をみてからにしよう。ワルプルギスの夜を相手に未熟な魔法少女がいても悲しい結果にしかないじゃない」

「それもそうだね。僕としてもせっかく魔法少女になってもらっても、死なれては困るからね。でも、このままじゃ君たちもワルプルギスの夜に勝てないんじゃないかな」

「マミがこんな状況だ。認めたくはないが、ここはQBの言うとおりである。しかし、マミは自信にあふれた笑顔で首を振る。」

「その様子だと…… なにか策があるのかい？」

「ええ。今までの戦いの中で足りなかったもの…… 私がいつまでもそれに気づかずにいるだけでも思うの？」

「……もちろん」

ほむらの呟きに気づくこともなく、マミは立ち上がるとびしっとほむらを指差す。

「足りなかったのは暁美さんの必殺技、そして二人のコンビネーション必殺技よ！」

「……は？」

「なるほど、その発想はなかったよ。これは興味深い」

「……え？　なんで納得してるのよ」

「私の『ティロ・ファイナーレ』のように暁美さんにも必殺技が必要なのよ！　暁美さんに必殺技が出来れば、私と暁美さんの必殺技のコンビネーションも生まれるでしょ？」

「……何か理論的に間違っではいるようで間違ってないような気がするけど、やっぱり間違ってるでしょう、これは」

「しかし、コンビネーションっていうのは二人の息があってないとダメなんだろう？　僕の見る限り、君達は名前の呼び方からして距離があるみたいだけど」

「言われてみれば、私たち二人とも『さん』付けで呼んでたわね。そ、それじゃあ……　これから暁美さんのこと、ほむほむって……　呼ぶわね」

「え？ 嫌です」

「わ、私のことは…… そ、その…… マ、マミマミって呼んでいいから」

「まっぴらごめんです」

マミは頬を染めて恥ずかしげに言うが、ほむらはそれをばっさりと切り捨てる。もっとも、そんなことを言っても聞いているマミではなかった。

「そ、それじゃあ、ほ、ほむほむ！ やっぱり、いきなりは恥ずかしいわね」

「そう思うならやめてください」

「それでね、ほむほむ。あなたの必殺技の名前はもう考えてあるの！ 炎をイメージしてね『ファイオーマ・ディ・インフェルノ』なんてどうかしら？」

「技の中身より先に名前だけ先に考えてどうするんですか」

「あら、気に入らなかったかしら？ 大丈夫、あと候補は百個くらい厳選してきたから！ 次の『暗黒獄炎時間支配』と書いてね……」

「名前なんてどうでもいいけど、なんか黒いイメージばかりなんですか？！」

「まったく、人間というのはいつも名前にこだわるね。全くわけが

わからないよ」

「バマミを人間の代表みたいに扱わないで……」

「もう、ほむほむったら。バマミじゃなくて、マミマミって呼んで
っていつてるでしょ？」

「そうだよ、ほむほ——」

乾いた銃声が幾度となく鳴り響き、QBは蜂の巣とされる。

「あなたにまでその名で呼ばれたくないわ」

「残念だけど、今のはQBが悪かったわ。ほむほむと呼んでいいの
は私だけなのよ」

「それは悪かったね。でも容赦なく銃で撃つたりしないで欲しいな。
代わりはいくらでもあるけど、勿体無いじゃないか」

そう言ってQBは何事もなかったかのように新しい体で現れる。

「はぁ……　　なんでこうなったのかしら。まったくわけがわからな
いわ……」

——そして、ワルプルギスの夜との決戦の日が訪れて

ワルプルギスの夜。その強大な力の前にマミマミもほむほむもQ
Bもまるで為す術がなく、敗れ去ったのだった。

残されたのは瓦解した街の中、不自然な程に青い空の下で倒れる姿であった。

「……私たち、もうおしまいね」

「グリーンフシードは？」

その問いにほむほむは無言で首を振る。

「そう……。ねえ、私たち、このまま二人で怪物になって……こんな世界、何もかもメチャクチャにしちゃおか？」

「僕としてはそれは好都合だよ」

「嫌なことも悲しいことも、全部無かったことにしちゃえるぐらい、学校とか、学校とか、学校とか壊しまくってさ……」

「君はどれだけ学校に思い入れがあるんだい？ それはそれでいいと思うけどね」

そういつて悲しげに微笑むマミマミに、ほむほむは一つのグリーンフシードを見せ、それで自分のソウルジェムの穢れを取り除く。

「さっきのは嘘。一個だけ取っておいたの」

「それは！」

「馬鹿な！ 君たちのグリーンフシードは全部、僕が盗んでおいたはずなのに！」

「あなたにはできなくて、私にできること。やらないといけないから」

「……うん」

「過去に戻るわ。こんな終わり方にならないように、歴史を変えてくる」

「約束するわ。次も絶対にあなたと友達になってみせる。何度繰り返すことになっても、必ずあなたと友達になって、あなたを守って見せる！」

「ちなみにQBに騙される前のあなた助けるのは無理だから。時間的にそこまで戻れないから」

「騙したなんて人聞き悪いなあ」

「う、ああ！」

そこでマミマミのソウルジェムに完全に穢れてしまう。ついに時間が来てしまった。魔女化の苦しみがマミマミの体を襲う。

「私、マミマミを魔女にしたくない！ 嫌なことも、面倒くさいこともあったけど、もっと前の時間で守ってもらったことだって、たくさんあったから」

「なんか今の時間の私は全否定された気がするけど…… 気にしないでおくわね」

「うん……」

「それと…… ほむほむ、やっとマミマミって呼んでくれたね。嬉しい……な」

「そ、それはつい…… そ、その！ う、うわああー！」

恥ずかしさを誤魔化すために放たれた一発の銃弾がマミマミのソウルジエムを砕く。これでマミマミの魔女化は阻止され、その時間の戦いは終を告げるのだった。

マミマミの遺体を背に、ほむらはそのまま過去へと向かう。

「歴史を繰り返し、またマミマミとワルプルギスに挑むつもりかい？」

「巴ミミの協力を仰いでも、むしろ面倒なだけだったわ。もう誰にも頼らない、もう誰も死なせない！ 全ての魔女は私一人で倒してみせる」

「ほむほむ…… 君はまさか」

ほむらの銃弾がまたQBを蜂の巣にする。

「私をほむほむと呼んでいいのはあなたじゃないわ……」

そうして、ほむらの戦いは続く。当初の目的を忘れてしまいがら……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7997v/>

魔法少女まどか マギカ 『もう誰にも頼りたくない』

2011年10月9日15時05分発行